

# 相模集所載「走湯権現奉納百首」試論

——誰が「権現返歌百首」を詠じたか——

近 藤 みゆき

## 一 はじめに

ももちの歌は、帯刀長、春の宮に言葉の花を尽くし、乙侍従、箱根の山に身の愁を開きてより出できたりて、今に跡となれり。

(『和歌現在書目録』仮名序)

『堀河百首』以降、「百首歌」という題詠形式が広く一般的なものとなった仁安年間(一一六六―六八)成立の『和歌現在書目録』の序は、「百首歌」の始まりをこのように記述している。前半の「帯刀長」は源重之、そして春の宮こと東宮は憲平親王(後の冷泉天皇)であり、重之が東宮の下命を受けて献上した「重之百首」を指し、また後半の「乙侍従」は、女流歌人相模の若い時期の女房名であり、夫大江公資に従って相模国在国中に、伊豆山走湯権現に参詣し、奉納した「走湯百首」を指している。「重之百首」は応和元年(九六一)―康保四年(九六七)、「走湯百首」は治安三年(一一〇三)―正月(万寿二年(一一〇五))春の成立。初期定数歌各作品の成立年次について著しく研究が進んだ現在では、「重之百首」は、天徳四年(九六〇)の「好忠百首」、同年の「源順百首」に次いで成立したものであり、また、一方の「走湯百首」は、女流の定数歌としても重之女・和泉

式部のそれに遅れ、村上朝末から後一条期まで断続的に続いた「初期定数歌」というジャンルの最後に位置するものと見るのが定説となっている。<sup>1)</sup>

『和歌現在書目録』の著者は清輔・顕昭たちと想定されているが、六条藤家として様々な家集を蒐集していたであろう彼らは、詳細な前後関係はともかく、重之のそれより「好忠百首」が先行すること、女流の百首歌としては重之女や和泉の作品の方が相模の「走湯百首」より早いであろう程度のことには思い及んでいたはずであり、そうでありながら、著者にとつて、あるべき「百首歌」のルーツと称し得るものとして、この二つの作品を提示したのである。すなわち、一つには皇権の下命に応じた応製百首、更に一つには、神仏への奉納を目的とした奉納百首である。本稿で考察する「走湯百首」は、女性ならではの不遇意識―夫への不満・子宝に恵まれないあせり・遠ざかる華やかな都と宮廷生活を綴り、権現に利益を祈念した点、まさに奉納百首の端緒と呼ぶに相応しいが、それだけではなく、近年では特に、それが前後に例を見ない特殊な形態である点に注目が集まっている。すなわち初度の奉納百首に、権現の返歌百首が届き、その権現返歌百首に相模が再度の奉納百首を送るといふ、

総計三百首にのぼる権現との「百首歌」贈答という壮大かつ稀有な作品群であることへの注目である。特に近年、疑問が呈され、かつ結論が出たと言いつれないのが、権現返歌百首の詠み手についてである。権現詠をそれとして疑いを持たなかつた時代には問題とはならなかつたのかもしれないが、現在の研究者で権現の返歌とする説はもちろん無いのであつて、犬養廉の、権現返歌百首は夫の公資が権現に成り代わり詠じたとする説<sup>2)</sup>、森本真奈美の、権現返歌百首も相模の詠作で、それは自作自演の三百首であるとする説の二説があり、現時点では犬養説を支持するものが多く、注釈や主題の考察もその前提でなされている<sup>4)</sup>。

しかし、権現返歌百首の作者と想定される人物は、夫の公資か相模自身かの二つに一つしか無いのであろうか。稿者にはいずれに立つたとしても、疑問点が残るのである。本稿では、稿者が従来行つてきた「*Text*」分析の手法<sup>5)</sup>を用いて作品間の表現を比較対照し、権現返歌百首の用語を徹底調査することなども援用し、その作者として第三の人物を想定し得る可能性が高いことを示したい。そのことを通じて、この作品群についての理解を新たにしてみたいと思う。なお以下、記述を簡略にするために、初度の奉納百首を「初度百首」、権現の返歌百首を「権現返歌百首」、相模が再度奉納した百首を「再度百首」と称し、論を進めることとする。

## 二 「初度百首」成立の背景

### ― 奉納の幣に和歌を書き付けるところ ―

相模が伊豆山権現に参詣をし、初度の百首歌を奉納したのは、治安三年（一〇三三）正月のことであつた。その間の事情を自撰本の

流布本相模集では、次のように記している。<sup>6)</sup>

つねよりも思ふ事ある折、心にもあらで東路へ下りしに、かかるついでにゆかしき所、見むとて、三とせといふ年の正月、走湯に詣でて、何ごともえ申し尽くすまじうおほえしかば、道に宿りて、雨つれづれなりし折、心のうちに思ふことを、やがて手向けの幣を小さき冊子<sup>せうし</sup>に作りて書き付けし。百ながらみな古めかしけれども、やがてさしはへてけしきばかりかすむべきならねば、まことにさかしう心づきなき事多かれど、にはかなりしかば、社の下に埋ませてき。……

「乙侍従」の召し名で三条天皇皇太后妍子のもとに女房として仕えていたキャリアを退き、夫・大江公資の相模守任官にともない、受領の妻として同地に下向してから三年、靈験あらたかなことで知られる伊豆山走湯権現への参詣を思い立つたのである。下向以前から人知れず心に抱え込んでいた悩みと、意に反する東国での生活を送つての、その時点での相模の心情が、走湯権現への祈念と相俟つて赤裸々に吐露されている。それ以前の定数歌と異なり、恋部に代えて「辛ひ」「命を申す」「子を願ふ」「憂へを述ぶ」「思ひ」「心のうちをあらはす」「夢」という題を設けた工夫は、いかにも社頭祈念に相応しい。

このように、神社参詣の折に、「願」を和歌にあらわし奉納することでその利益を祈願する行為自体は、すでに以前からあつた。しかもその「願」をあらわした和歌を奉納する「幣」に書き付けることも一般に行われていたようである。具体的に、女性の参詣でその様子が詳細に記述されているのは、『蜻蛉日記』上巻・康保三年九月の、稲荷詣、賀茂詣の件である。<sup>7)</sup>

九月になりて、世の中をかしからむ、ものへ詣でせばや、かうものはかなき身の上も申さむ、などさだめて、いと忍び、あるところにもものしたり。ひとはさみの御幣に、かう書きつけたりけり。まづ、下の御社に、

いちしるき山口ならばこながらかみのけしきを見せよとぞ思ふ

中のに

稲荷山おほくの年ぞ越えにける祈るしるしの杉を頼みて

果てのに、

かみがみと上り下りはわぶれどもまださかゆかぬこちこそすれ

またおなじつごもりに、あるところにおなじやうにて詣でけり。ふたはさみづつ、

下のに

かみやせくしもにや水屑みくづつもらむ思ふ心のゆかぬみたらし

……(以下略)……

夫の不実<sup>ふじつ</sup>に心満たされない時期の道綱母の寺社参詣であるが、前半の稲荷詣ではAのように「ひとはさみの御幣に」、後半の賀茂詣ではBのように「ふたはさみづつ」にして、何首かの和歌を書き付けている。「かうものはかなき身の上も(神に)申し上げよう」という動機、そしてそれを晴らすべく、神への現世利益の祈念を幣に書き付け奉っていることなど、「走湯百首」の背景にあった、女流の寺社参詣の様式をうかがわせよう。表現においても一首目の「いちしるし」、二首目の「さかゆく」などは「庭火たく神楽の庭の

いちしるくわが榊葉のさしはやさなむ」(再度百首・四七七)、「深山路の音に聞きつるさかゆけは願ひ満ちぬる心地こそすれ」(初度百首・三一七)と、「走湯百首」、それも「権現返歌百首」ではない歌群にあり、特に後者は、参詣の山道の厳しい「坂行く」に「栄ゆ」を掛けるという修辞法も共通している。奉納詠の定型表現とも言えようか。

それにしても、相模には、歌人としての自負が高ければ高いほど、寺社参詣歌にも趣向を凝らす意欲が高かったことは想像に難くない。それが、「幣」を小さな冊子仕立てにして、「百首歌を書き付け納めるといふかつて無い着想を生んだのであろう。相模は、「走湯百首」以前にも、定数歌創作の経験がある。経験があり、かつ好忠以来の「初期定数歌」が本来的に兼ね備える沈倫の身の上を嘆き、陳情するという意味を良く承知していたからこそ奉納百首という領域に初めて踏み出すことが出来た訳である。その点、寺社奉納詠の文学史の中で、この行為は一つ評価されるべきと思われる。それだけに、「雨宿り中の思いつきの行為」という言葉を鵜呑みにしてよいのかどうか。院政期以降と異なり、この時代、百にのぼる歌を詠ずるのは決して容易なことではなかった。重之でさえ、東宮からは三十日の日数を与えられている(『重之集』重之百首詞書)。この時の相模も、伊豆山参詣出立時には、あらあらの心づもりがあったと考える方が自然ではあるまいか。奉納和歌を記した小型の冊子は、『相模集全釈』が指摘するように、経筒に入れ社頭に埋められたのである。社頭に埋めた「願」を他者が掘り起こすことはまずあり得ない。後年、自身の家集編纂の折に「走湯百首」を入れた相模は、当然「初度百首」の手控えを持っていた訳で、これを見て返歌出来る状況と

しては三つの場合が考えられる。第一には自作自演、第二には隠し持っていた手控えを誰かが見つけた場合、そして第三には、相模自身「初度百首」の複本を特定の誰かに送った場合である。第二であることがこれまでの説の前提になっているが、積極的に自作をアピールする女房歌人相模のあり方を考えると第三の可能性も否定出来ない。そのことを念頭に置き、「権現返歌百首」の詠作者を更に慎重に考えてみよう。

### 三 「権現返歌百首」作者の定説への疑問

初めに述べたように、「権現返歌百首」については、夫・公資の行為とする説、自作自演説の二説がある。自作自演説はすでに犬養廉が批判したように、「確かに「相模集」には日記的性格が濃い。しかしこの百首のこうした虚構は何のために、いかにしつらえられたものなのか。……（中略）……作者の意図が、いささか判然としない。」とする同じ疑問を抱かずにおれない。更に言うならば、この「権現返歌百首」とそれへの「再度百首」によって、靈験が得られたのであればまだしも、「権現返歌百首」が届いた年、国司の公邸が火事となるという逆の結果を招いてしまった。

……またこれより、ただならむやはとて、さて、その年、館の焼けにしかば、かかることの冊子して、必ずかかる事なむある、穢らわしきほどにおのづからと、人の言ひしかば、あやしく、本意なくて……

〔再度百首〕詞書

不幸の種となり、批判を浴びた所行を自作自演し、家集に書きとどめるであろうか。

同時に、この一文は、「権現返歌百首」が夫・公資の詠作かどう

かも疑わせるものでもある。「あのような詠歌奉納などをすると、必ずこのような難事が起きるのだ。不浄で厭わしいくらい、めつたに起きないことが起きてしまつて」と、手厳しい非難をした「人」とは、他ならぬ公資その人なのである。「相模集全釈」は、これを「公資が多少の皮肉をこめてこのように言つたものか。」とするが、この一文を先入観抜きで読むならば、多少どころではない、あてこすりの非難である。公資自身も返歌百首を詠じていたのであれば、ここまで冷淡な言葉を放つてであろうか。

関連して想起されるのが、『相模集』に記されている、妻・相模の文学好きに公資が業を煮やした時の一文である。

はかなき事にむつかりし人、あやにくに、物語、歌など、ありける限りあさり出でて、みな焼きてしを、せむ方なくて嘆く頃、近くて聞く人のいかにぞと言ひたりしかば

あき果ててあとのけぶりは見えねども思ひさまさむ方のなきかな（相模集・一九〇）

些細な事が気に入らず気分を害して、相模の所持していた物語や和歌をすべて焼いてしまった「人」は、夫である公資の他に考え難い。結婚当初、大外記を希望していた公資の拝任が決まりかけた時、議定において、小野宮実資が「而シテ小野ノ宮ノ右大臣ノ云ク、相模ヲ懐抱シテ秀歌ヲ案ズル之間、公事闕如歎ト云々。」と発言し、座の諸卿たちの大笑いするところとなって大外記拝任が沙汰止みとなった―『袋草紙』雑談に載るあまりにも著名な逸話で、公資と言えば、相模のために和歌にも精進する理解ある愛妻家の印象があまりに強く持たれているが、実際には、妻の歌才や文学好きは、次第に公資を苛立たせ、諍いの原因ともなつていったのであつた。館

の火事の原因を、あたかも走湯権現との贈答百首にあるように当てつける発言は、相模の和歌・物語を焼き捨ててしまう衝動と表裏をなす雰囲気を漂わせている。それは「権現返歌百首」が公資作でないからこの発言ではないだろうか。

加えてもう一点、公資に百首歌が詠めたかという疑問がある。すなわち、歌人としての公資の力量への疑問である。公資は能因の知友であり大江嘉言とは血縁関係にあるなど、和歌に関心の高い人物であったことは確かだが、家集は伝わらず、また当時の私家集、勅撰集（後拾遺・金葉・千載）、私撰集（玄々集）などから集成出来る和歌は、重複を省くと僅か十二首に過ぎない。

その内容は、たとえば朋友、能因が『玄々集』に撰した事ありて、あふみちにこもり侍りけるころ

ことしげき世の中よりはあし引の山のうへこそ月は澄みけれ  
（玄々集・一一九）

のように特殊な事情下で詠まれたものや、相摸守にて上り侍りけるに、老曾の杜のもとにてほととぎすを聞きてよめる

東路の思ひ出でにせんほととぎす老曾の杜の夜半の一声（後拾遺集・夏・一九五）

鈴虫の声を聞きてよめる

とやかへりわが手ならしはしたかのくると聞こゆる鈴虫の声  
（同・秋上・二六七）

五月闇あまつ星だに<sup>さつきやみ</sup>出でぬ夜はともしのみこそ山に見えけれ  
（賀陽院水閣歌合・「照射」題・勝歌）

のように、新奇な歌枕や歌ことばを眼目として直裁に詠み下した

ものが多く、複雑な縁語掛詞で構成した歌はほとんど無い。それに對して、「権現返歌百首」の詠歌は、

埋み火も君にもあらぬあまぶねも冬はうきよにこがれてぞ行く  
（三七四）

\*「埋み火」と「焦がる」「夜」「舟」「浮き」「漕がる」は縁語、「浮き」と「憂き」、「焦がる」と「漕がる」、「（うき）世」と「夜」は掛詞。

と、縁語・掛詞を駆使して複雑な文体を形成している詠歌がかなり多い。同歌は、「初度百首」の「埋み火にあらぬ我が身も冬の夜におきながらこそ下にこがるれ」（二七五）を受けけるもので、主題「埋み火」の二七五番歌も縁語・掛詞を多用しているが、その歌の「おき（起き）」と「熾」を掛けるから、「沖」を連想し海に流れ出る「舟」へ発想を転換し、また「下」に対し「浮き」を対応させるといふように、もと歌を踏まえた上での難易度の高いレトリックが用いられている。このような例は「権現返歌百首」に多く見え、いかにも歌を詠み慣れた者の詠作の感がある。公資の持ち味とはかなり趣を異にした詠歌が多いと言えよう。

前述のように、この時代、百首という数を詠みこなすことは、世に知られた歌人でも至難の技であった。「初度百首」を土台にした返歌百首とはいえ、公資に、レトリックを駆使し、かつ「権現」という仮面をかぶり百首を詠みおこせるだけの力量があったかは、やはり極めて疑わしい。では、歌人・相模の奉納百首に、「権現」を演じ、返歌百首を詠じる力量のある歌人とは誰であろうか。「権現返歌百首」と公資、そして相模と交友ある何人かの歌人の家集とを文字列総比較した結果、用語法などにおいて、突出した共通点のあ

る人物として、藤原定頼が浮かんでくるのである。

#### 四 「権現返歌百首」に浮かび上がる定頼らしさ

さて、ここではまず、「権現返歌百首」と「定頼集」(『四条中納言定頼集』)を<sup>①</sup>分析の手法で文字列比較することによって、「権現返歌百首」と定頼の詠歌の近さより明確に言えば、「権現返歌百首」の詠作者は定頼ではないかと推測させる具体例をあげてみよう。<sup>②</sup>を用いた文字列総比較では「あきかぜ」のようなごく短い文字列から「おもひこそやれ」のように七文字を越えるような長文字列までをすべて捉える事が出来るが、やはり特に歌人の個性を反映しやすいのは長文字列一致であろう。「権現返歌百首」と「定頼集」の共通文字列のうち、他には用例がほとんど無く、かつ単語より、「言い回し」に近い長い文字数の一致する歌を具体的にあげてみよう。

※以下、家集については歌人名、勅撰集等については書名を歌頭に提示し、歌番号を末尾の○に記した。また語のあとに《》で付した数字は、文字数をあらわしている。

(1) いそがるるかな《7文字一致》  
重之…白河の関よりうちほのどけて今ほこがたのいそがるるかな(二〇九)

定頼…住吉のながみの浦も忘すられて都へとのみいそがるるかな(三六二)(四〇〇)

権現返歌…よき事にあらぬ事をば夢ばかり見せじとのみいそがるるかな(四一五)

再度百首…埋もれ木の中には春も知られねば花の都へいそがる

るかな(四二七)

\*他、「源氏物語」「成尋阿闍梨母集」に各一首。

#### (2) いやまさりなる《7文字一致》

後撰…河とのみ渡るを見るになぐさまで苦しき事ぞいやまさりなる(九九二)

拾遺集…わが恋はなほあひ見てもなぐさまずいやまさりなる心地のみして(七二三)

定頼…物思ひのいやまさりなる花盛りいかなる人のこころ行くらん(五)

権現返歌…いとうれしよにいとはれし今よりはいやまさりなる身とを知らせむ(四〇〇)

\*他、資隆・俊成の家集に各一首。

#### (3) おもふことなきみ《8文字一致》

長能…つねよりは思ふ事なき身にしあれば七日ふるともなにとぞ思ふ(一一二)

坊城歌合…思ふ事なき身ながらも秋といへばおほかたにこそあはれなりけれ(二一)

定頼…思ふ事なき身ともがな冬の夜の月の光をさやかにも見ん(二九〇)

権現返歌…やせしまの松のちとせをかぞへつつ思ふ事なき身とはしらずや(四〇五)

上東門院菊合(長元五年)…菊の花うつろふ色を見てのみぞ思ふ事なき身とはなりぬる(一六・弁乳母)

\*他、「別雷社歌合」「千載集」に各一首

(4) おもふことなると《8文字一致》

村上天皇…思ふ事なるといふなる鈴鹿山こえてうれしきさかひとぞ聞く(一一六、拾遺抄・拾遺集に入集)

義孝…思ふ事なるとか聞きしかひもなくなうちとけぬ夜半の白波(二四)

定頼…山寺のあかつき方の鐘の音をわが思ふ事なるときかばや(定…一八三)

権現返歌…思ふ事なるとの浦に拾ひつつかひありけりと知らせてしかな(三八〇)

\*他、藤原頼実の家集、『更級日記』に各一例、『狭衣物語』に二例

(5) かげをならべてみる《9文字一致》

定頼…ます鏡とげど涙に曇るらん影をならべてみるはうれしや(四〇三)

権現返歌…年を経て影をならべてみる人と老いせぬものは菊の白露(三六一)

(6) こちくのこゑ《6文字一致》

蜻蛉日記…雲居よりこちくの声を聞くなへにさしくむばかり見ゆる月影(中巻・道綱母)

高遠…今やとて月みる顔に待つ我をここにこちくの声ぞうれしき(九一、皇子中宮の女房「むまこそ」の詠歌)

公任…月影にこちくの声ぞ聞ゆなるふりにし妹は待ちやかぬらん(五一一)

定頼…思ひきやこちくの声もはるかにて風の便りに聞かんもの

とは(一七三)

権現返歌…呉竹のこちくの声を聞きしよりよにながらへむふしは添えてき(三八五)

再度百首…呉竹にうれしきふしをそへたらばまたもこちくの声を聞かせむ(四九〇)

\*他、『古今六帖』二首、『大和物語』(二二二段)一首、『永久百首』一首。

(7) しるしばかりは《7文字一致》

定頼…かくれたるしるしばかりはあひ見てき寝るまでことはたがへはてなむ(三〇七)

権現返歌…箱根山あけくれいそぎ来し道のしるしばかりはありと知らせむ(四一七)

(8) たひらかに《5文字一致》

古今六帖…ふるさとをわかれてさける菊の花たひらかにこそにほふべらなれ(三七三四)

定頼…吉野山さかしき峰をたひらかに行きかへるべき祈りをぞする(二九四)

権現返歌…たひらかにあらまくほしきものならば都のかたをながむばかりぞ(三八七)

再度百首…たひらかにおくられたらば都より神の心を思ひおこせむ(四九二)

(9) としをへてわが《7文字一致》

伊勢物語…梓弓ま弓槻弓年を経てわがせしがごとうるはしみせ

よ(二四段)

拾遺抄…年を経てわがよりかくる言の葉を君が千代までかへじ  
とぞ思ふ(五九六、抄異本歌、集に無し)

公任…たづね来る人もあらねば年を経てわがふるさとの鈴虫の  
声(一〇〇)

定頼…立ち返りたれならすらん年を経てわがくり返し行きしふ  
る道(三七四)

権現返歌…いたづらに過す月日は年を経てわが身につもるもの  
としらなむ(三七九)

\*他、『後拾遺集』『久安百首』に各一首。  
(10) みやこのかたをながむ《10文字一致》

定頼…思ひかね都のかたをながむればさびしき月ぞ水にうつれ  
る(八六)

権現返歌…たひらかにあらまくほしきものならば都のかたをな  
がむばかりぞ(三八七)

\*他、用例無し。  
もとより、これら十例のことば・言い回しはすべて「初度百首」

には無い。権現詠を「再度百首」が受けて同じことは・言い回しを  
用いているのは(1)・(6)・(8)の三例にとどまる。

「権現返歌百首」の詠歌年次は治安四年(一一二四)一月～四月  
十五日。また「定頼集」の所収歌は、寛弘期にはじまり、長元期

(一一二八)・長暦・長久(一一四〇)～一四三三までの詠歌が順不同  
に集成されているので「権現返歌百首」での用例との前後関係は厳

密には不明だが、用例の掲出では「定頼」を先にあげた。(1)～  
(10)はいずれも定頼と「権現返歌百首」以前の用例が1～3例ほ

どにとどまり、かつ、後続の用例もごく少ない。当時から後代にか  
けての流行語というより、ごく個人の詠み方の反映を思わせるもの  
である。そのように他の歌人の用例が数少ない中で、定頼父の公任  
の用語と重なるものが二例(6)・(9)ある点も留意される所であ  
る。

しかし何と言っても注目すべきは、(5)・(7)・(10)―「かげ  
をならべてみる」「しるしばかりは」「みやこのかたをながむ」とい  
う、大変長い文字列で、定頼と権現返歌百首にしか認められない用  
例がある点であろう。ちなみに公資歌と「権現返歌百首」について  
も同じ文字列総比較を行っている。公資は前述のように歌数があま  
りに少ないので、こうした比較の判断の根拠とすることは難しいが、  
判断材料の一つとして結果を指摘しておくならば、こうした長文字  
列一致は一首も無い。また、仮に相模が「初度百首」の草稿を起こ  
し和歌に熟達した都の誰かに送ったとして、たとえば「能因集」と  
の比較の結果を述べるならば、10文字に及ぶような長文字列一致は  
無く、長いものでも、「おもひそめてき」「わがやどの」「おひたる  
みれば」「つきのひかり」「としらなむ」「なかりせば」など、平安  
和歌全体を通じて用例の多い単純な言い回しか、「はなのみやこ」  
のように能因の前後の時代に急速に用例が増える流行表現のような  
歌ことばしか求めることが出来ないものである。やはり上記の、定頼  
と「権現返歌百首」間に認められるような長文字列一致は、特異な  
ものであり、偶然の一致とはみなし難いと言えよう。

そして、用例の内容を検討すると、更に一歩踏み込んだ事柄が浮  
かび上がってくるフレーズがある。(5)の「かげをならべてみる」  
である。同歌は、『四条中納言定頼集』では、次のような贈答歌と



なっている。

遠き所の、名ありける人の、形見とて、ものこひたりける、  
※やるとて

君が影みえもやするとます鏡とげど涙になほくもりつつ

(四〇二)

※定家本では「やりたまひけるに」  
といひたりし人の、なほ、同じ心なるをみたま(う)て

真寸鏡とげど涙にくもらん影をならべてみるはうれしや

(四〇三)

遠方にあつて逢えないせめてもの形見を求める人物に「真寸鏡」を贈る。当然その相手とは浅からぬ関係にあつた女性であろう。四〇二番歌詞書「やるとて」は定家本では「やりたまひけるに」となっており、森本元子が指摘するように、この贈答は、定頼が形見に真寸鏡を送り、それに対して女が四〇二番で、「いただいた鏡にあなたの姿が映るかと、懸命に磨ぐけれど、私の涙で曇るばかり」という歌を返してきたので、定頼は「差上げた真寸鏡が磨いても涙にくもるようですが、その鏡に私とあなたの面影を並べて見るのは嬉しいことでしょう」と返した……、そのようなやり取りである。定頼は、相手の女性が自分と「同じ心」であることを嬉しく思っている。そして「影をならべてみる」という表現は、同歌の要となる発想なのである。「影をならべてみる」とは、言わばその女性との密かな符牒なのであつて、そのような言葉が「権現返歌百首」で用いられていることになるのである。贈答相手が「遠方にいる女性」となると、その人こそ、実は相模である可能性が限りなく高くなるのではないだろうか。

定頼は長和三年(一〇一四)十月から、中宮権亮となり、当時三条天皇の中宮であつた妍子に仕えている。相模が妍子家の女房であつたことは前述した通りだが、特に寛仁元年(一〇一七)六月から八月にかけて妍子は定頼の舅、源清政の邸に移り住んでおり、定頼はいっそう妍子の側近く仕えていたものと思われる。稿者は公資と相模の結婚を長和三・四年(一〇一四・一〇一五)年頃に想定しているが、妍子家女房としての相模が、宮権亮・定頼と全く交流が無かつたとするのも、またむしろ不自然であろう。定頼は多くの女性と浮き名を流しており、両者がこの段階でどの程度の関係だったのかは判断が難しいが、女房と貴公子官人にありがちな関係が無かつた訳ではないのであろう。特に歌壇の大御所公任の嫡男の定頼は、歌人・相模にとつて和歌や文事を介した交流にもつとも手応えを感じる、憧憬する存在であつたに違いない。

地方色豊かな伊豆山走湯権現への参詣奉納詠、それも「百首歌」という凝つた趣向の詠草を、帰るべき場所として望んで止まない都へと贈る。それは、その内容を理解し評価出来る、贈るに足る相手であつてこそ成り立つものである。当時の相模にとつて、宮廷文化の象徴のような定頼は、その対象として誰より相応しい人物だったのでないだろうか。好忠の初めての「百首歌」も、地方に住む好忠が身を憂う思いを、都にある友人・源順に贈つたものであつた。地方から都へ、沈倫の身上を嘆き送る。それもまた初期定数歌の一つの作法なのでもあり、相模はその手順を正しく知つて踏まえているとも言えよう。

以上、文字列分析による比較を踏まえた結果から、「権現返歌百首」の詠み手として、本稿では藤原定頼説を提起することとする。

## 五 女流歌人にとって書き記すに足るもの

当初、相模が定頼に「初度百首」を贈った時、返歌までは期待していなかったのかもしれない。「初度百首」では、「思ふ事ひらくる方を頼むには伊豆のみ山の花をこそ見め」(二二四番)「東屋の軒の垂氷を見渡せばただ白銀を茸けるなりけり」(二七七番)のように、都人にとっては珍しいであろう、伊豆山參詣ならではの詠や鄙の風情を詠じたもの、あるいは、犬養廉が指摘するように、「年多く返しきぬれど荒れぬるはわが中山の古田なりけり」(二二八番)、「若草を込めてしめたる春の野に我よりほかのすみれつますな」(二三〇番)のような、夫の不実を嘆く歌も多い。しかし、「心のうちをあらはす」題の五首では

しのぶれど心のうちに動かれてなほ言の葉にあらはれぬべし

(三〇五)

手に取らむと思ふ心はなけれどもほの見し月の影ぞこひしき

(三〇六)

みつも星あまつ星をもやどしつつのどけからせよ谷川の底

(三〇七)

賤ちぢの男おとこになびきながらも身にぞしむくらゐの山の峰の松風

(三〇八)

あはれびの広き誓ひをまねくまで言はぬ事なく知らせつるかな

(三〇九)

と、忍び慕う人(三〇五)、遠い存在と知っていても恋しい「ほの見し影」(三〇六)、天空に輝く星(三〇七)、身にしむ「位の山の松風」(三〇八)と次々と比喩を変化させながら、貴人・定頼への

止め難い思いを「言はぬ事なく知らせつるかな」と詠じているのである。権現への奉納詠を装ってこそ、これほど大胆に定頼への思いを「あらはす」ことが出来たのであろう。そこでは夫の公資を「賤の男」と言い切つてもいる。豊かな富や子宝に恵まれることを願ひ、氏の繁栄を祈念する歌々と、大胆な秘密の思いの告白。この「初度百首」を、東国からの発信として都の定頼に贈ることは、相模にとって高度な遊戯、知的挑戦であったのかもしれない。そして、歌人・定頼はその挑戦をやり過ごしはしなかった。「権現」の立場で返歌百首を創作した訳である。相模の走湯參詣は正月の事であったので、一月末頃には、それは意匠を凝らして都に届いたであろうか。受け取った定頼の心境は、好忠から百首歌を受け取った源順の「このごろをかしきことあむなり。与謝の海天橋立わたりより、中絶えてほど経にけるといひおこし、知るも知らぬも、耳にも目にも、をかしきと聞かせ、おもしろしと見せて、心のうちに思ひける言の葉をあらはし……」(順百首序文)の所感とまさに重なるところがあつたに違いない。

定頼の力量を以てすれば、一・二ヶ月で、その百首全体の意図を読み解き、「権現」という一定の視点から、一首一首に返しを付けることは容易であつたに違いない。一月の権現參詣から三ヶ月後、伊豆山神社の大祭が催行される四月十五日にあわせ、おそらく伊豆山の僧侶に言い含め、ことさらめいた形で返歌百首を届けたのである。この打てば響く手応えこそが、相模の求めたものであつた。先に見た国司の公邸が焼亡した際の、公資の冷淡な皮肉も、この贈答の真の相手を知っていたからこそのもではなかつたらうか。相模の和歌や風雅への傾倒は、宮中への思いや強烈な上昇志向

と背合わせのものとしてある。相模国での国守の妻としての生活が三年に及んでなお、創造的和歌への意欲の衰えない妻―それは、むしろ夫の苛立ちを駆り立てるのであつたらう。

中流階級の女流にとつて、書き記すに足るものとはなにか。後藤祥子先生は、『更級日記』論の中でその意識を、伊勢大輔・赤染衛門・大式三位らを実例にとり上げながら、女房たちの実生活上の夫と宮中での貴公子との束の間の恋のあり方、そして夫との現実より身分高き男性とのそうした束の間の恋をこそ「語るに足る生きた証」として家集に書き記した彼女たちの心高さについて論じられた。相模の「走湯百首」三首贈答にも、その心性を見るべきであると思ふのである。

「走湯百首」の三種贈答が、自作自演でも、夫・公資との営為でもなく、都にある定頼を相手としたものだとすると、この三種の百首歌各々の詠歌の意味や、贈―答―贈と展開する掛け合いの解釈も、大幅に違う意味や色合いを持つことになるであらう。本稿ではまず、第一歩として藤原定頼説を提示した。批評を受けた上で、そうした視点からの個々の解釈を進めたいと考える。

注(1) 初期百首の成立は、「好忠百首」天徳四年(九六〇)、「順百首」天徳

四年(九六〇)頃、「重之百首」応和元年(九六一)〜康保四年(九六七)、好忠「三百六十首歌」安和元年(九六八)〜天禄三年(九七二)、「惠慶百首」天元期頃(九七八〜九八二)。なお「惠慶百首」の成立時期の推定については、近藤みゆき『「惠慶百首」試論』(『西日』)分析によつて見た「返し」の特徴と、成立時期の推定」(久保本哲夫編『古筆と和歌』

〔笠間書院、二〇〇八・一〕を参照されたい。

(2) 犬養廉『平安和歌と日記』(笠間書院、二〇〇四)、初出は「相模に關する考察―いわゆる走湯百首を巡つて」(『論叢王朝文学』笠間書院、一九七八)。「走湯百首論―権現詠の作者をめぐつて」(『古典和歌論叢』明治書院、一九八八)。

(3) 森本真奈美「相模百首について」(『相模国文』8号、一九八一・三)。

(4) 武内はる恵・林マリヤ・吉田ミスズ共著『相模集全釈』(風間書房、一九九一)。

(5) 近藤みゆき「nグラム統計処理を用いた文字列分析による日本古典文学の研究『古今和歌集』の「ことば」の型と性差」(千葉大学『人文研究』29巻、二〇〇〇)など。また、最近のものとしては、注(1)近藤論文。

(6) 以下、和歌の詞書・本文・歌番号は「新編国歌大観」により、適宜清濁を付し、また踊り字を改めた。

(7) 『蜻蛉日記』の本文は、新編日本古典文学全集『土佐日記 蜻蛉日記』(小学館、一九九五)、『蜻蛉日記』は木村正中、伊牟田経久校注・訳による。

(8) 流布本相模集五二五〜五九二番の、「これはまことにいはけなかりしうゐ(稿者校訂)事に書き付けて人に見せむこそあまじけれ」の識語を有する六十五首の歌群で、通称「初事歌群」。同歌群の表現には、先行する初期定数歌との重なりが多く、相模初期における定数歌の習作と想定される。(近藤みゆき『古代後期和歌文学の研究』(風間書房、二〇〇五)第三章第三節の二)。

(9) 定頼の家集は、二種あって、その成立・内容・歌数が大きく異なっている。ここでは、歌数が四四一首とより多くの和歌を取める二類本・明王院旧蔵本系統の前田家本を主とし、同本に収載されていない一類本の独自歌六五首を補う形で比較を行った。定頼集をめぐる諸問題については、森本元子『私家集の研究』(明治書院、一九六六)。

(10) 森本元子注(9)著書ならびに同『定頼集全釈』(風間書房、一九八九)

解説。

(11) 森本元子『定頼集全釈』、当該歌解説。

(12) 一類本では「とほきほどなる人のもとよりかがみとぐものこひたまひける、やりたまひけるに」とある。二類本の「名のある」は、定頼の残した草稿を編集する際、相模が既に晴儀歌合で活躍していたことから、付されたものかもしれない。

(13) 近藤みゆき注(8)著書、第三章第一節の一。

(14) 後藤祥子「平安女歌人の結婚観―私家集を切り口に―」(論集平安文学第三号『平安文学の視覚―女性―』勉誠社、一九九五)。

## 謝辞

後藤先生に、平安中期の和歌研究の奥深さとおもしろさを一からお教えいただいたのは、学部三年時の授業においてである。特に、相模に関心を持ち、研究者としての第一歩を踏み出してから、今日に至るまで、私が研究を続けて行く上での羅針盤は、後藤先生が次々とご発表になられる多彩なご論文の数々であった。先生のご指導のもとで出発した相模に関する研究の中でも、なかなか私見を示すことの出来なかつた課題について、三十年かけて得た一つの考察を、ご学恩への感謝の思いとともに、先生に捧げます。